

## 2025年度 JIBSN 対馬セミナー&ツアー参加記

石田聖（長崎県立大学、JCBS 会員）

### （1）対馬セミナーに登壇して

2025年10月25日（土）、対馬市巖原の対馬交流センターにて、境界地域研究ネットワーク JAPAN（JIBSN）が主催する対馬セミナーのメンターとして登壇した。

今回、「リスクとまちづくり」を主題に、まさに境界に立つ離島自治体が抱える現実を浮き彫りにする場となった。参加者の顔触れは、研究者、行政職員、大学院生と幅広く、90名近い参加があった。

開催地である対馬市をはじめ五島市、小笠原村、竹富町の各自治体が報告した事例の中で、とりわけ鮮烈だったのが小笠原村の「航路リスク」である。小笠原航路を担う「おがさわら丸」が、船舶スクルー等への漁網の巻き込みによって長期離脱の危機に陥ったという報告は、島にとって交通が単なる移動手段ではなく、「生存基盤」であることを改めて突き付けていた。東京都心から1,000km 彼方の海に浮かぶ小笠原にとって、片道24時間かけて本土と結ぶ航路はまさに生命線である。貨物、郵便、医療物資、人の移動、そのすべてが一本の航路に依存している。ゆえに、航路の停止は経済的合理性を超えた“人間の尊厳”の問題であるようにも思えた。この点は、昨年度の与那国セミナーでも強調された視点でもあり、国境離島を考える上で、繰り返し立ち返るべき論点であることを再確認した。

また、開催自治体である対馬市からの報告は、漂着ゴミの国際的なホットスポットであることから、海ゴミの「防波堤」として対馬の漂着ゴミ対策に向け、国内外への積極的な「対馬モデル」の発信していく姿勢が報告があった。竹富町や五島市からは、環境負荷の可視化、漂着ゴミ対応、二次離島における海上タクシー廃業に伴う人の移動、地域医療の逼迫など、島嶼地域が抱える複合的な課題が共有された。

今回、交通と環境にかかわるリスクを中心にコメントを担当したが、自治体ごとに異なるリスクの構造が、どれも「境界に生きる社会」の宿命として根を張っていることを痛感させられる。海に囲まれた島嶼地域では、自然環境が生活の前提条件であり、同時に最大の不確実性要因でもある。加えて、人口減少・高齢化などに伴う地域の担い手不足、慢性的な財政制約、気候変動の進行といった複数の要因が重なり、境界地域におけるまちづくりとリスクに関する議論は地理的な問題にとどまらず、制度的・社会的リスクとして顕在化している。それでも、セミナー会場では、悲観よりも「どう続けていくか」「次の一手をどう考えるか」をめぐる前向きな知恵の交換が満ちていたようにも思う。境界とは最果てではなく、むしろ未来を最初に試される場なのだと感じさせるセミナーであった。



小笠原村の渋谷村長による挨拶



対馬市の一宮副市長による報告



JIBSN 対馬セミナーの様子

## (2) 訳官使ツアー参加記：境界をつなぐ声の歴史

11月26日、セミナーの翌日は「訳官使ツアー」に参加した。朝鮮通信使と対馬の関係は広く知られているが、その背後で日本と朝鮮の言葉を媒介し、外交の要所を担ってきたもう一つの通信使ともいわれる“訳官使”の歴史は、これまで十分に照らされてこなかった領域である。今回のスタディツアーは、その忘れられた存在に光を当て、対馬独自の外交文化を読み解く試みであった。

案内役は、対馬訳官使の研究を行っている島根県立大学の石田徹先生。石田先生の丁寧な解説に導かれながら足元の歴史を辿るうち、対馬という島が、単なる周縁ではなく、日本—朝鮮関係の「翻訳の現場」であったことが立体的に浮かび上がったように思う。訳官使は、幕府や李氏朝鮮の意向を汲み取りつつも、しばしば独自の判断で交渉に臨んだとされる。つまり、中央の意図を忠実に伝える中継点ではなく、むしろ状況に応じてメッセージの解釈や強調点を調整する外交実務者でもあったといえる。

そこに見えてくるのは、国境の島・対馬藩が果たした戦略的な主権の行使である。常に中央政府の監視下に置かれながらも、朝鮮との折衝は現地の判断力に依存しており、彼ら訳官

使の技量が両国間の関係を左右する局面も少なくなかった。境界地域のローカルアクターが、国家の声を形づくる一端を担っていたのではないかと想像を掻き立てられた。

訳官使の研究は、外交史にとどまらず、通訳史、文化接触史、さらには境界地域研究、国際関係論の新たな素材ともなりうるのではないか。中央と地方の関係、制度が想定する役割と現場の裁量、文化摩擦の中での交渉術—こうしたテーマは、現代の多文化共生や国境政策とも密接に重なるようにも感じた。足元の対馬の集落を巡りながら、当時の訳官使がどのように言葉を選び、どのように誤解なく、しかし自領の利益を損なわずに外交を進めたのか、想像が尽きない。個人的には、潜商(密貿易)が幕末までほぼ恒常的に対馬で行われており、訳官使含め対馬側の人間が行うことも、朝鮮側の人間が行うこともあったという歴史が興味深かった。

ツアーを終えて振り返ると、訳官使の存在は、過去の外交が中央だけで完結したものではなく、周縁の知と実践が国家のかたちを支えてきた歴史を教えてくれる。もっと注目されてもよい日朝関係の歴史的側面を学ぶことができた。前日の対馬セミナーに続くこのツアーは、境界地域におけるローカルアクターへの想像力をさらに広げてくれる貴重な機会となった。



ツアーで訪問した巖原の国分寺



ツアーで訪問した美対馬の住吉神社



巖原にある光清寺での石田徹先生による解説



上対馬西泊にある西福寺住職による解説

### (3) 韓国軍港都市の歴史を歩く―鎮海と佐世保を比べながら

対馬から韓国・釜山に渡り、ツアー最終日には、釜山から車で1時間ほど、慶尚南道の鎮海（チネ）を訪問。鎮海は桜の名所としても知られるが、日本統治期に整備され、現在は韓国海軍の拠点として機能する街路や建造物群には、植民地支配と軍事的合理性に基づく都市計画の痕跡が色濃く残されている。天然の良港とそれを囲む山並みという地形的優位性を利用した空間配置は、かつての旧軍港都市の論理を今に伝える「歴史の地層」そのもののようにも感じられた。

この鎮海の風景は、私の故郷である長崎県佐世保市との間に深い類似性を想起させる。佐世保もまた、明治期の鎮守府設置に始まり、戦後は米海軍基地を抱える都市として歩んできた歴史を持つ。両都市に共通するのは、山と海が近接し平地に限られるという制約の中で、軍事施設、港湾、市街地が配置された点である。軍事的要請によって決定づけられたこの都市構造は、街の基盤として存続し続けている。外洋に面しながらも安全な内湾を持つ両都市の港は、防衛の境界であると同時に、人や情報の移動を媒介する接続点としても機能し、常に国際情勢の影響を受けてきた。

鎮海と佐世保の比較から見えてくるのは、単なる景観の類似にとどまらない歴史的意味である。鎮海は植民地支配から独立国家の建設へ、佐世保は旧帝国海軍の拠点から米軍基地の街へと、それぞれ異なる文脈を歩んできたが、国家の意志と地域社会の生活が交差し続ける場所であるという点において、両者は通底しているように感じ、海を隔てた二つの軍港都市の比較は、過去の記憶を手がかりに、今なお変容を続ける都市の本質を浮き彫りにしているように思えた。

鎮海での最後の訪問地は、「鎮海軍港マウル歴史館」であった。町の中心部はかつて日本人が多く居住した地域であり、現在も日本式家屋が残っているが、歴史館の建物も旧日本式家屋をリノベーションしたものである。現地ガイドの方によると、この歴史館は鎮海区（昌原市）の自治体と地域が主体となって出資した博物館だという。佐世保には国が運営する海自資料館（セイルタワー）があるが、小規模ながらも地域に密着したこうした軍港歴史資料館は少なく、私にとっては非常に新鮮に映った。

短い滞在時間ではあったが、今回の鎮海訪問は、佐世保で育った私にとって、故郷の歴史を新たな視点で見つめ直す大きな契機となった。今後は、佐世保と鎮海という二つの「軍港都市」の形成プロセスや、そこに生きた人々の記憶について、機会があれば探究を深めていきたいものである。また、軍港の歴史に加えて、佐世保にほど近い平戸市と鎮海との縁も感じたツアーとなった。中世、陶器の名産地として知られた鎮海周辺（旧・熊川県）は、高麗茶碗の一種「熊川（こもがい）」の故郷でもある。文禄・慶長の役における熊川倭城の建設

と時を同じくして現地の生産は終焉を迎えたが、その技術は途絶えたわけではない。平戸松浦氏 26 代当主であった松浦鎮信により平戸へ、そして佐世保へと招聘された陶工たちの手によって、佐世保を代表する伝統的工芸品、肥前陶磁器「三川内焼」として引き継がれていた歴史があるということを改めて学ぶ機会となった。

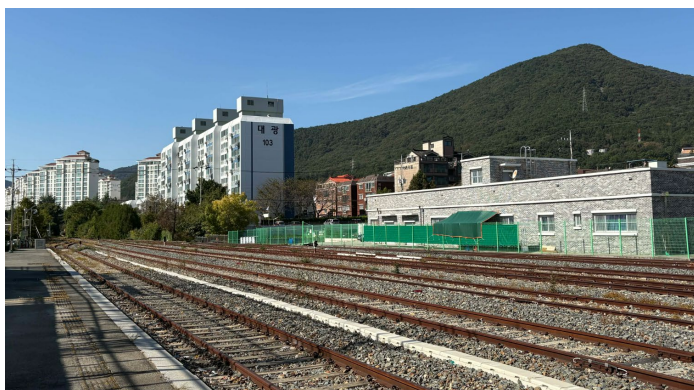
佐世保、平戸と鎮海、これらの歴史的なつながりを知り、再び鎮海を訪問すべき理由が増えたかもしれない、実りあるツアーとなった。



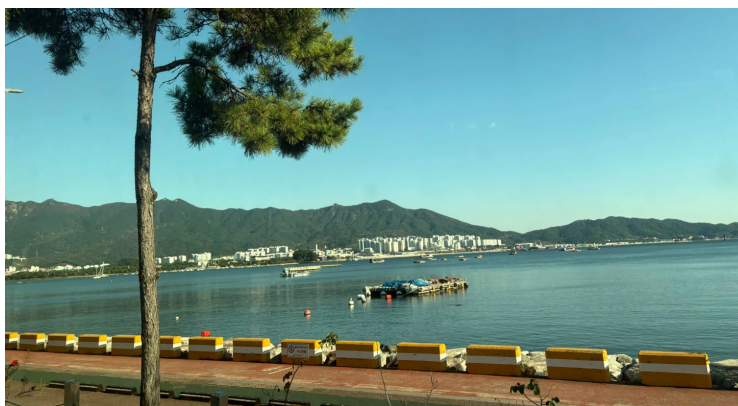
鎮海中心部に残る日本式建築物



鎮海軍港マウル歴史館



鎮海駅沿いの鎮海線（現在は貨物列車のみ運行）



鎮海の沿岸部